

哲学神髓一家言

目録

開題 自第一節至第五節

緒論

第一章 哲学ノ定義

説明の 一 自第六節至第十一節

第二章 哲学ノ區分

説明の 二 自第十二節至第十八節

本論

第一部 歸納哲学

第三章 歸納哲学研究ノ四種方面

説明の 三 自第十九節至第二十四節

第四章 主観的方面檢覈ノ四種要素

説明の 四 自第二十四節至

東洋書院

緒論

第一章

哲学ノ定義

哲学ハ全宇宙一切萬有ノ根本的原理ト其全宇
宙一切萬有ヲ表現スル所ノ力用ト其表現シタ

ル所ノ現象ノ状態ト其吾人々類ノ生活ヲ統紀

スル所ノ規範トヲ研究スルノ学ナリ

説明の一

第六節

凡そ一科の学問を研究せんことを

當てを當初日先づ第一に其学問の定義と

定めし其研究せんとする所の目的と範圍と
と明らかにして而して後其研究を取り掛る
の一般的な順序を為して居るから本章で
今茲に研究せんとする所の哲学の定義と定
めぬの不可有るが一体精密に言へば何等の学
問と見るに拘らぬ一科の学問の定義と其学問
全体の研究の結果を總括してその不可有る
から未だ其学問の研究も取り掛らぬ前
其学問の眞の定義を完全と知る可きゆゑに
これをいふなり学問の定義と云ふものを其れと

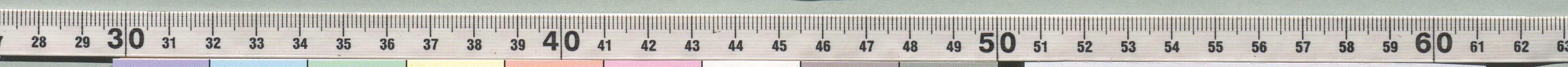
東林原製

研究せらるゝの便宜の爲めは假定的に其目的範
圍等と示して置くまでもなく不可有る何況ん
や今茲に研究せんとする所の哲学の如きを
古往今來哲学諸家未だ嘗て其定義を説く
諸説の一致しなことの無い位を不可有る
から余も余の目して哲学研究必要の事項下
有りと考へる所の宇宙觀問題と人生觀問題と
を一括して之を解決するに順序よく知り易
いやうに本章に於ける哲学の定義を成る可
き條に定めし不可有る

第七節 本章の哲学の定義の中を四種の
問題と解が包含せらるる第一を此全
宇宙一切萬有の根本的原理を何下有ると
云ふ問題第二を其根本的原理を此全宇宙
一切萬有と表現する所の力用即ち理法契機
を如何の有るると云ふ問題第三を其力
用を因と表現せらるる所の現象の状態を如
何の有るると云ふ問題第四を此全宇宙一切
萬有の根本的原理を吾人々類の生る活動
紀たる所の規範を如何の有るると云ふ問題

東洋原典

下有る佛教の方で言へば第一の問題を真相
論第二の問題を縁起論第三の問題を法相論
第四の問題を觀行論下有ると云ふこと
以て
吾人々類の哲学研究の第一動機第一誘因を
我々如何の生活が可きかと云ふ簡單なる
際問題下有る我々如何の生活が可きかと
云ふも我々何下有ると知らぬを力らぬ我
々何下有ると知り得るを我々待罰
我々關係して居る所の非我即ち我以外の



全宇宙一切萬有と何下有るうと知らぬをな
らぬ又我と非我との關係も如何の有るう我
うら非我が出来ぬの非我がうら我が出来ぬの
我と非我とを別々のもの下有るう同一もの
下有るうと云ふこと考へねばならぬ所
うらして科学も哲学も宗教も其の
来いの下有るうら其動機誘因うら言へば
第四の問題うら始つて第一第二第三の問題
に移つての下有るけきとも研究の順序うら
て本章の列挙うら如く第一の問題あり

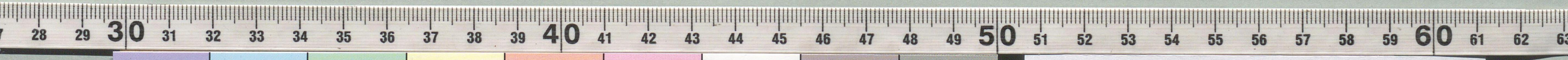
東林厚堂

解結一次に第二第三の問題を解決し終つて後始つて
第四の問題即ち我を如何の生活に可まうと
云ふ人生觀問題を解決するは出来ぬ
不有る
第八節 此哲学の定義の中を包含せらるる
有る所の四種の問題の第一は此全宇宙
切萬有の根本的原理を何下有るうと云ふ問
東西古今の哲学界宗教界に於ける宇宙觀人
生觀を一貫する所の研究の基礎不有る此全
宇宙一切萬有と結果不有るうと見ゆ其原因

この研究 二部論三つの
不有る此全宇宙一切萬有と現象不有ると見
此も其実在の存在不有る此根本的の原理と云ふ諸子と普
偏的究竟的統一的等の意味と云ふ令人不居つ
て説明の必要の便利の不有るのら今之を根本的の原理
と名づけの不有るが其名称を實に種々様々
又建つて居不有る印度系統が梵(ブラフマ)と云ふ真如と
云い涅槃と云い法身体なりと云ふのも其れ
不有る支那系統が道と云い太極と云い陰陽
不測の神と云い皇天上帝なりと云ふのも其
不有る猶太系統がエホヴァと云いゴッドと云
東洋の今
東洋の今

東洋原典

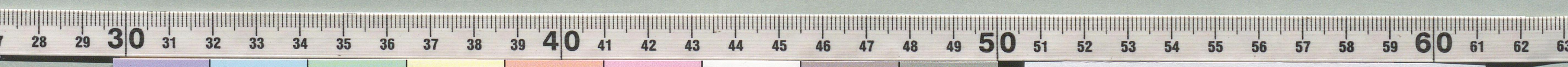
ヒファカルのト云ふのも其れ不有る又希臘系
統がイデーのと云ふピサラスのと云いアブ
ソルのと云ふのも其れ不有る皆此全
宇宙一切萬有の原因若くは実在と云ふ
可のと云ふの意のと云ふの不有るの根本的述下
き之に向つて全宇宙一切萬有の根本的の原
理と云ふ名と下りの不有る是の東西古今
に於けるの哲学界宗教界に於ける宇宙觀人
生觀の對象を只哲学の方で主觀的と之と
認識の宗教の方で客觀的と之と信仰崇拜



宙一切萬有表現の理由と明らかなきを為め
の最も緊要なる問題の有るのこりらる其生
滅変轉活動消長の基礎^{根柢とみる所の力用}の有る夫のライブニッ
ツヤ「シュツペン」ハ「ウエル」ル^{やうまく}言ふ所の完全
真理^のと云ふのを此力用の^中義と不完全と説
明し^{ライブニッペンとフエルニッペン}ら^{大體の}中哲学系統
の眞精神眞骨髄^のの完全なる説明と此^全第二
問題の解決に^{始めて}明瞭なるもの^{の有る}
夫のスピノザの哲学系統で全宇宙一切萬
有と絶待平等唯一無二なるサブスタンス^{の本}は

東横屋製

還元して仕舞ふて有るけ^こも其絶待平等
唯一無二なるサブスタンス^の何うして此相待
的なる差別的なる無限無^{子複多端 全宇宙}量なる一切萬有の
起つて来い^のと云ふ説明の^初の^所の^{から}ぬ^の
の^後の^の哲学史家がスピノザの哲学系統と獅子
の棲んを居る穴の^一百獸が此穴に入ら
足跡と澤山有るが此穴の^一出る来い足跡と
一つもせんか^のと云ふ嘲るのも全此第二
問題の^{解決}の^{解決}を^{居る}の^のと有る
第十節 第三問題即ち全宇宙一切萬有の



根本的原理の表現——所の現象の状態を如何
何と有るうと云ふ問題を前の第一問題第二
問題と云ふ本違つて方面から見れば所の研究
第一問題解決の爲めと此全宇宙一切萬
有の研究の起発點として其根本的原理を究
撃——第二問題解決の爲めと其究撃——得ら
所の根本的原理を研究の起発點として其全
宇宙一切萬有を表現する所の力用を究撃し
てその下有るが此第三問題解決の爲めとを
此全宇宙一切萬有の根本的原理を表現——

東林堂

所の全宇宙一切萬有の現象の状態即ち心理
的物理的等各種の現象も如何と區別し如何
に聯絡せしむ如何に反接せしむ如何影響せ
らるる居らるると云ふことと研究——且是等
各種の現象も^{全宇宙一切萬有の}根本的原理の力用の如何なる
方面の^{展開如何なる現象の}表現せらるる居らるると云
ふことと研究せらるるの不可有る
哲学の科学が経験の因と得らる所の材料の供
給と考へて其組織の基礎と云ふると同時に科
学が只假定的に定めて置ける所の對象に向

△此全宇宙一切万有
の根本的原理が表
現する所の現象
の形態の研究
である

つゝ其假定的對象の由（真の）起る所の原理と供
結して其（基礎）と確定せしむるもの下有る（啓言）
も心理学の心は放ける物理学の物に放ける
が如き其心と云ふを何下有る物と云ふは
何下有るもの眞の心と云ふのが有るをい
る物と云ふのが有るをいふと云ふは
と別問題として（精確に）便宜上心と云ふのが有
る物と云ふのが有ると假定して其心やら
物やら内容的外延的關係の理法と吟味して
是の公理通則と定むるの之下有るを哲学

泉橋屋製

の方面を心と云ふは物と云ふものとは此全
宇宙一切万有の根本原理が此全宇宙一切萬
有と表現する所の力用の如何なる方面の発
動の如何なる要素の発動下有ると云ふは
とと確定して（各）科学研究の基礎と鞏固と成る
の下有るから此第二問題の解決と各科学の
基礎と定むる為め（最も）重要なる研究下有
るの下有る
第十一節 第四本章に於ける哲学の定義の
中を包含せらるる所の四種の問題の第

四即ち最後問題即ち全宇宙一切萬有の根本
的原理が吾人の類の生活活動の統制する所
の規範と如何なるものか云ふ問題を第七節
で言ふ所の吾人の類の哲学研究の第一動
機第一誘因なり我々如何なる生活を目指す
云ふ極端な實際問題の解決不有が未
だ知らず初迦牟尼佛陀の出世の本懐四十
九年の夜法を述べたが此問題解決のため
有る孔子の博々として七十國を徘徊し老年
まで席煖まるひまもせつたのも此問題解決

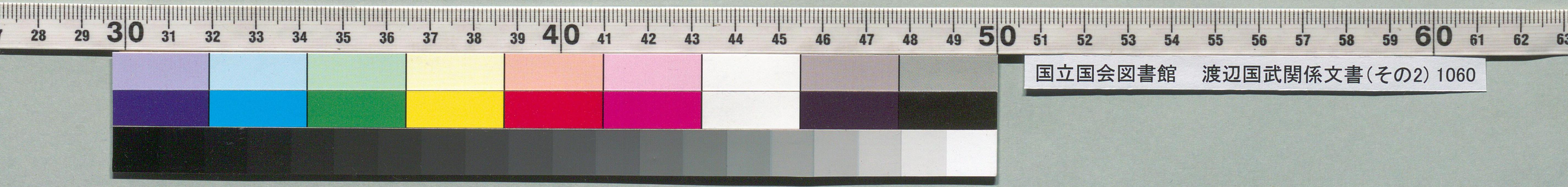
東橋居士

の為め有る 耶蘇基督がパリサイ人やサドカ
イよ反對せしめて十字架を掛つたのも此問
題解決の為め有る クラテリスの死刑に
處せらるゝ毒藥を飲んぶのも此問題解決の
為め有る 哲学問題を分つて理論的部門と
実行的部門との二種の部門とを此第一問
題第二問題第三問題の解決を理論問題の解
決で此第四問題の解決を実行問題の解決と
有る又哲学問題と分つて宇宙観問題と人生
観問題との二種の問題とを此第一問題第



二問題第三問題の解決と宇宙観問題の解決
決す此第四問題の解決と人生観問題の解決
不有る
従前の倫理哲学形而上学審美哲学宗教哲学
神学等不此人生観問題に就て種々の議論も
有るけれども其^{元末}根本基礎が此全宇宙一切万
有の根本的原理が自己の中に具有一て居る
所の力用の^各方面より割出しどのをも何をも
それら其議論が皆一方に偏倚して居やと
一方^面より見^眺むべき至當の道理不有るやと見

東橋屋



第二章 哲学ノ区分

哲学ハ其研究便宜ノ為メ之ヲ四種ノ部門ニ

分ツ第一ニハ歸納哲学第二ニハ演繹哲学第三

ニハ現象哲学第四ニハ規範哲学即チ是ナリ

説明の二

第十二節 哲学研究の動機第一誘因と第二

節を言ふは如く我々如何に生活に可なり

云ふ實際問題不有るが其研究の對象を此全

宇宙一切萬有の根本的原理不有る何故可也

△我々の非我が如何なる
の非我なるかを研究
すべし
一つは我と非我を
いふのでなくとも
いふのでなくとも
いふのでなくとも
いふのでなくとも

を我と如何に生活し可きかと言ふ問題と
解決せらるるを前にも言ふ如く我と何なる
かといふ事と知らぬを知らぬの我と我
一和と関係して居る所の非我即ち我以外の
全宇宙一切萬有を何なるかといふ事と
も知らぬを知らぬの我と非我との関係を如何
に有らうかといふ事をも研究せしむるべし
所ありて宗教問題も起る科学問題も起る
其れの一層發達進歩して哲学研究の必要と
為り遂に全宇宙一切萬有の根本的原理と把

東林堂製

捉一其れと妙合一致して天地の生命を知り
宇宙の脈搏の觸るる非我を吾人と類を決
して其生存活動に於て安心立命の地を得る
ありと出来ぬといふ場合に到達し得る
るらるる哲学研究の對象を全く此全宇宙一切
有の根本的原理を有るものとする
其れは研究の對象を全く一の非我と
其れは研究の對象を全く一の非我と
の非我と即ち此全宇宙一切萬有の根本的原理
を研究せしむるべし
哲学の區分と云ふ題目の下に哲学と歸納

学と演繹哲学と現象哲学と規範哲学との四
種の部門に分つたものと全く其研究便宜の爲
め^ので有るなり本哲学系統をも哲学と四種の
部門的哲学に分つて有るべきことも其研究の
対象として一つの即ち此全宇宙一切昂有
の根本的原理と其甲種前後左右と三つやう
なり四種の方面より観察を有ると考へそ
居らばとせらるゝので有る
其証據を本章に於て^{其研究便宜の爲め}区分し^前四種の部
門的哲学と云ふものと全く前章に於て決定し

東洋書院

し^所の哲学の定義より起るとするに即
ち第一なる歸納哲学と云ふものと前章に於て
る哲学の定義の中より包含せらるゝ^{と有る所の}第一問
題の解決に首なる第二なる演繹哲学と云ふもの
も前章に於て^{と有る所の}哲学の定義の中より包含せら
るゝ^{と有る所の}第二問題第三なる現象哲学と云ふもの
も^{と有る所の}定義の中の第三問題の解決第四なる
規範哲学と云ふものと哲学の定義の中の第四
問題の解決の爲め本章に於て^{此四種の部}
門的哲学を区分し^{と有る}

第十三節 歸納演繹の二語を是より哲学又
と倫理学に用い來りし語を有
格段の事例より出発して普遍的の立言又
と命題を到達するのと歸納法と云い普遍的
の立言又と命題より出発して格段の事例を
適用する可き格段の立言又と命題を引出
れのと演繹法と云ふの下有るは此歸納演
繹二法の利害得失を執ると是より哲学又倫
理家なるもの於て自己の好む嫌ひを因る主張
と所の種々様々の例を有るべきことも要す

範本居奉

るは哲学上の於ても倫理学上の於ても此歸
納演繹の二法を真理の研究に於て車の両輪
の如く鳥の双翼の如く決して偏存偏廢は可
らざるもの下有る決して偏存偏廢は可ら
ざるもの下有るべきも其研究の基礎と鞏固
にして人として容易に解せず肯せしむ
が為めよと歸納法より起つて演繹法に移る
方が便宜を有る考へる
そこを本章を歸納演繹の二語を前より三つと
所の普通の意味を一層制限緊密にして甚可る

擴張敷演して此全宇宙一切萬有と研究して
其れと表現して所の根本的原理と究明する
のと歸納哲学と名づけ此根本的原理の研究
して其全宇宙一切萬有と表現して所の力用
と発見のものと演繹哲学と名づけその下有
るらる普通は哲学上又と論理学上より下
中所の歸納法階級はと云上のとを少く其意
味を違して居るの下有る
第十四節 ここ本章は於て區分列挙して
所の四種部門的哲学の中の第一を歸納

第14章

哲学と前節を云ふ如く前章は於ける哲
学の定義の中に包含せらるる所は四種
の問題の中の第一問題と解決する所の部門
不此全宇宙一切萬有の根本的原理は何下有
るのと云ふ疑問を答へるの下有る從前の哲
学系統を四種の根本的立脚地可有と云ふ
系統の中のいつより一の立脚地の上を立て
居る四種の根本的立脚地と唯心的立脚地
と唯物的立脚地と心物二元的立脚地と不可
思議的一元的立脚地とを有る而して唯心的要素

と物と認識—思想を有する所の心は此全宇宙一
切万有の根本的原理を有すると主張を^{せしめ}け^る
る^も認識せしめ思想を有する所の物と離れ
る^も認識—思想を有する所の心は存在せしめと云ふ
は^も出来ぬ^も心も亦や^も第八節不言
す所の依他的依存的の^心と云ふと此全宇
宙一切萬有の根本的原理^を有する^も第二なる^も
唯物家^論と之は又して心は認識せしめ思想を
有する所の物に此全宇宙一切万有の根本的
原理を有すると主張を^{せしめ}け^るも^も認識—思想

泉樓厚慶

は^も所の心と離れて^も物に存在せしめと云ふは
と^もや^もし^も出来ぬ^も又^も證據なき^もは^もと^も不^も
る^も物も亦や^も依他的依存的^もと云ふ
此全宇宙一切萬有の根本的原理を有する^も
は^も出来ぬ^も第三なる^も心物二元^論
心と物認識—思想を有する所の心と認識せしめ
思想せしめ所の物^に此全宇宙一切萬有
の根本的原理を有すると主張を^{せしめ}け^るも^も若
し^も認識—思想を有する所の心と認識せしめ思想
せしめ所の物と此心物二元論を言ふ

何と何とを異つて居るといふ何と何とを異つ
て居るといふとを争ふて居るといふ過きぬ（四つ）
と心を有るもの不有るが物を云ふもの不有
ると言ふ唯心論不有る心を云ふもの不有
ると言ふ唯心論不有ると言ふ唯物論を
有る心と物とを一つのもの不有ると言ふを
不可思議的一元論不有る心と物とを異つたもの
不有ると言ふを二元論不有る又神を有
るもの不有るが宇宙を云ふもの不有ると言
ふと云ふ宇宙論を宇宙と有るもの不有るが神

東林居士

を云ふもの不有ると言ふを無神論不有る神
神論も宇宙も有るもの不有ると言ふを神を
宇宙の外に宇宙と神の外に在る単立して居
ると見る所の有神論を神も宇宙も実を云ふ
もの不可思議なるもの、両面不有るもの
神も宇宙も宇宙と神を有ると見る所の無神
神論も有るやうに有るといふもの一つ
のものの不有るといふ異つたもの不有ると言
ふ所謂有無一異の四句を争ふて居るといふ
ものが其の有るといふもの一つのもの不有る

とみ異つゝいふ不有るといふ有之異の
四句も此全宇宙一切萬有の根本的原理の自
己の中は具有して居る所の力用の如何なる
方面を分ちて如何なる方面より此有之異
の四句が起つて来ると互相の聯絡を如何なる
關係に於て居て如何なる相互に相表定し
相表定しつゝ居るといふ根本基礎と為る
所の土臺が明らかになり居らぬから従前
東西古今の哲学界宗教界に於ける宇宙觀人
生觀といふものも只其表面に顯はれて居る

東林居處

所の名称をいふと改めをうけつゝなりとも
ト循環的軌道と迴轉往復して居るといふ
馬鹿をいふに於て下有ると不有るといふ
此全宇宙一切萬有の根本的原理の自己の中
に具有して居る所の力用の方面及び其互相
の關係を精細に吟味し研究して一切の宇宙
觀人生觀の根本基礎と為る可き土臺を定む
るの爲に此演繹哲学の本を徹掌するに此
演繹哲学を本哲学系統の直精神直骨髓と最
も直接に最も明白に最も完全圓滿に講述し

この所の部門を歸納哲學と其斷定の準備と
現象哲學と規範哲學とも其原理と現象上
に規範上の應用各種のありと云ふこと
第十八節 四種の部門的哲學の第三の現
象哲學と哲學の定義の中の第三問題と解決
する所の部門的哲學を全宇宙一切萬有の根
本的原理が表現する所の現象の状態を如何
に有るものと云ふ疑問の解法とする
の目前の事ハ此である所の現象の状態とす

泉樓唐

差石別雜並として共存并立して居る科學の
方と此雜並として共存并立して居る所の
十差石別種を様々なり。現象を豊富に任せ
提へて之と研究し其現象の關する所の内容
的外延的關係の理法と吟味して之に向ふ
一定の公理通則と主たるもの下有るが第一節
をい言ふ如く此現象を直に有るもの下有
るを以ていふ有るあり研究せぬ事なし
なり此現象も此全宇宙一切萬有の根本的
原理の自己の中を具有する所の力用を因る表



現せらるるものなるなり此現象が表現せら
れし根本基礎を全宇宙一切万有の根本的
原理が自己の中より具存して居る所の力用の各
方面^{の中の条件}より未だして居らぬとせらぬ其れと
研究して一面より各科学より理通則と定め
る所の假定的対象に向つて其由る基づく所
の原理と借信して^{其基礎}と確定せし^{他の}一面より
此全宇宙一切万有の根本的原理と歸納哲学
の如く^本性質^の的^のなりとせらるるべく^本演繹^の哲学の
如く力用的^のものなりとせらるるべく昔人の目前は^{この}問題

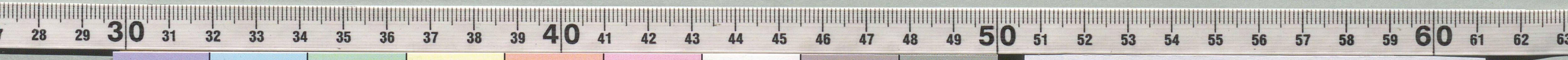
東洋思想

此て居る所の外面の現象の狀態より^之研究せら
るるの^の此第三^の部門的哲学即ち現象哲学
の本分職掌を有る
第十七節 四種の部門的哲学の^{中の}第四あり規
範哲学と三子の^の哲学の定義の中の第四問
題と解決せらるる所の部門的哲学を此全宇宙一
切万有の根本的原理が昔人々類の生存活動
と統絶せらるる所の規範と如何に有らうと云ふ
疑問^の解決せらるる所の^の第八節をも言ふ^{所の}
昔人々類の哲学研究の第一動機第一誘因

つゝ我々如何に生活に可なりと云ふ實際問題
と研究するの此規範哲学は所謂倫理問題
宗教問題審美問題乃至形而上問題の
人類の向つて安心立命の地即ち最大幸福なる
最大正義なる最大超越最大高尚なる生活
と遂げしむるの哲学研究の極致と云ふ此規範
哲学の研究は既に遺りたる種々の不
々る前の三種の部門的哲学即ち歸納哲学演
繹哲学現象哲学と畢竟此規範哲学の根本基
礎と鞏固にしては為るべき準備を有ると云ふ

東林書院

と直一心の有る
規範として吾人の類の動作思想情感乃至其
正當の目的を實現せんと為るに服従せしむる
了らぬ所の原則のありと有る即ち吾人の類
の動作が其正當の目的を實現せんを為るに
善の規範に服従せしむるに吾人の類の
思想が其正當の目的を實現せんを為るに
真の規範に服従せしむるに又吾人の類の
情感が其正當の目的を實現せんを為るに
美の規範に服従せしむるに云々



類と指称して之を規範とするのて有る其れ
を有る有りて世人の類の生存活動と統一
なる所の規範を定むるを是非とも此全宇
宙一切万有の根本的原理を自己の中に見
て居る所の方甲の各方面各要素と研究換
置して其中より此規範を割り出して来むに
たらしめぬのて従前より行ける人類生活の規範を
さやうな根本基礎より割り出して来ぬに
以り甲是乙非は倫理を以て決定せらるるに
らぬ有様を有る此問題を解決して人類

泉林堂

の生存活動に向く確乎不拔として豪邁自在
たる高尚雄偉田満靈活たる規範となるのみ
此規範哲学の本分職掌を有る
第十八章 以上は説明上の四種の部門
哲学即ち歸納哲学と演繹哲学と現象哲学と
規範哲学とありやうに四種に分れるのも実
に此全宇宙一切万有の根本的原理を自己の
中に見有して居る所の力用の四種方面の発
動より起るものて有る其れを今説明し得可
き場合を毎いり本論第二部演繹哲学と語

本論

第一部 歸納哲学

第三章 歸納哲学研究ノ四種方面

歸納哲学ハ四種方面ヨリ全宇宙一切萬有ノ根

本的原理ヲ研究ス第一ハ主觀的方面第二ハ

客觀的方面第三ハ相待的方面第四ハ絶

待的方面即チ是ナリ

説明の三

第十九節 歸納哲学ト第十四節ニシテ

この三行の文字
と字の向方
を折るべき
は折るべき

如く哲学の定義の中に包含せらるる居る四
種の問題の中の第一問題を解決する所の部
門哲学で此全宇宙一切萬有の根本的原理を
何の有る可と云く疑問を解決するといふ其
本を験掌として居るの存る
全宇宙一切萬有を研究するといふて散漫
しく此一切萬有を一つ一つ捉へて其根本的
原理を研究するといふて行ふぬの存る
る其小を至極簡便なる方法の存る此全
宇宙一切萬有の研究に就てと昔よりして

東洋原典

予予予と云く研究を研究と云く別して前世
紀以降を經驗的自然科学の発達を著しく長足
なり。進歩と成して居る可其經驗的自然科学研
究の盡頭極素に於てとや經驗的自然科学の
力を其此と研究するといふ出来ぬらりと
云ふのを哲学の方へ引渡して所の問題の四
つ有る其四つの問題を哲学の方へ受取らる哲
学研究の起る點と致してのが即ち本章の列
挙致して所の四種方面を有らる
第二十節 其四種方面の第一方面の主観的

方面と申ゆのを何下有ると云へば此全宇
宙一切萬有に儼然として存して居ると云
ふはとと認後思想に理會し思想する所の
主觀的精神の本質を用と何下有る可力用を
如何下有ると云ふ問題を有る
⑤全宇宙一切萬有と申す中より主觀的精神
と客觀的の自然も一切之と包含して居るの
有るが其中で先づ第一に客觀的の自然より主
觀的精神より儼然として存して居ると
云ふはとと辱竟し認後し理會し思想する所

東林居士

主觀的精神の
本質を何で
る其儼然と
如何下有ると
研究する
一方は下
の下の有る

の主觀的精神の本質を何下有ると其儼然と
如何下有ると云ふ問題と充分に解決して
而して後其儼然として存して居る所の客
觀的の自然の研究を取り掛らぬを其研究の基
礎と云ふ所らして此主觀的方面の研究
と第一方面として真先を置かす下有る
第二十一節 第二方面は客觀的方面と申
ゆのを何下有ると云ふは主觀的精神とし
て自己の存立と辱竟し認後し理會
し思想する所の客觀的の自然の力

持て居る （主観的精神と客観的自然とは）
相対的の共存並立して居ると云ふ方面より
眺めて其関係と研究をのべ此第三方面に
る相対的方面の研究を有る
第二十三節 第四方面より、絶対的方面と云
申すのとは何ぞ有るかと云ふと、主観的精神
と客観的自然との関係に於て第三方面即ち
相対的方面の反對なる方面より眺めて其関
係と研究をのべしと云ふは主観的精神の
主観的精神として認識せらるゝのと云ふの

東林書院

と客観的自然の其れとして認識せしむるの
らを有ると同時に客観的自然の客観的自然
として存在せらるゝとの出来るのと主観的精
神の其れ存在と認識して其れとして存在せ
しむる （主観的精神と客観的自然）
と皆受動的の所謂自性 （自性有るのみ） 有る （自性有るのみ） 只互に他の
りのよヨリスカリ他のりの （主観的精神と客観的自然） 得たり
の （主観的精神と客観的自然） 得たり
絶対的の融合一致して居ると云ふ方面より
眺めて其関係と研究をのべ此第四方面に

る他行的方面の研究不有る

第二十四節 ^而主観的精神の働りきよ孰く感

覚とる理會とる思想とる觀念とる又と感性

とる智性とる理性とる種々様々の名称不有

る種々様々の働りきよ區別せらるる有り又

心理学の方よりを智情意の三作用 ^{主観的精神と客観的精神の} 區別せらるる

別 ^其 有るが余の考は稜水と是とる度合の

相違不有て決して其性變の相違不有るん

不有る働りきよけと受身の見うは眺めらるる

の相違不有る決して其關係の相違不有るん

東林堂



一二の例と言へば客観的自然が主観的精神

と接觸し ^{方面} から眺むるを感覚と云い主

観的精神を客観的自然を断定する方面より

見ると思想と云ふは ^{只此の關係するもの} 感覚と決して世

人の考へるやうに単純なものであると思想

と同一働りきよのり不有るが只働りきよの度

合が ^下 働りきよとして居る ^{主観的精神} の不有る主観的

精神が働りきよけの働りきよ客観的自然の

受身の働りきよ ^下 働りきよ ^{主観的精神} と主観的精神

神の客観的自然 ^{主観的精神} と主観的精神

主観的精神。受身の側より立ち客観的の自
在が働かすけの側より三小方面より見れば主
観的精神と客観的の自在と接受整齊の所
ら智と平と下智と下智も情も皆一
所より働かすけの主観的精神と決して働かす
得る所の下智も情も皆一
その第二節以下の各節不認識と申して
有るのを前より云ふ所の種々の名称と一括
して之と認識と名づけしの下智も情も皆一
三作用を合同一致して働かすけの下智も
智

東林書院

後力は依り認識しとの意志力は依り裁制
情感力は依り好悪と云ふても画しん
の下の
うら本講述下も主観的精神の働かすけ向
下より種々の名称と一括して認識
力と名つとのを有るうら其より一言
致してまゝ尚心理学上より智情との三作
用との區別の不完全なるを現象哲学の
中の心理的方面の研究に至ると後述する
精下なる

第二十四節

本章に於て歸納哲学研究の四

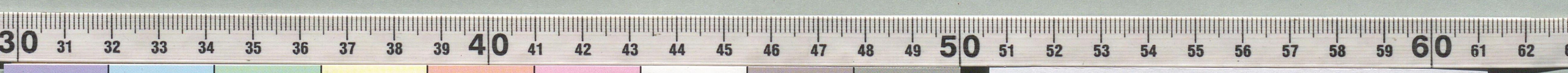


種方面即ち主觀的方面と客觀的方面と相待
 的方面と絶對的方面とがうやうや四種方面
 に分けて居るのも第十八節下四種の部つ哲
 学子孰と言ふ如く此全宇宙一切萬有の根本的原理は自
 己の中子具有して居る所の力用の四種方面
 の発動より起つたの不可決して偶起し四
 種方面より起つたのである又此四
 種の方面が各自其檢覈の要素として自己の
 中子包含し居る所の四種の檢覈的要素もや
 して皆此全宇宙一切萬有の根本的原理が自

東林堂製

△やてし決し
 偶起し四種
 の要素はそれ
 以下もらん

己の中子具有して居る所の力用の四種方面
 の発動より起つたの不可決して偶起し四
 種の方面が各自其檢覈の要素として自己の
 中子包含し居る所の四種の檢覈的要素もや
 して皆此全宇宙一切萬有の根本的原理が自
 己の中子具有して居る所の力用の四種方面
 の発動より起つたの不可決して偶起し四
 種の方面が各自其檢覈の要素として自己の
 中子包含し居る所の四種の檢覈的要素もや
 して皆此全宇宙一切萬有の根本的原理が自

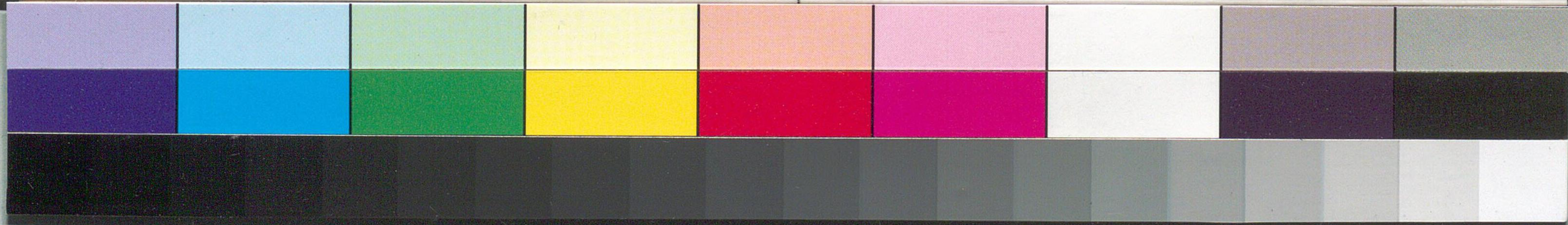
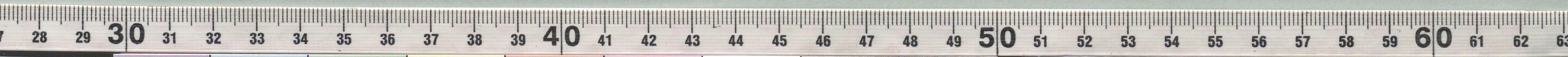
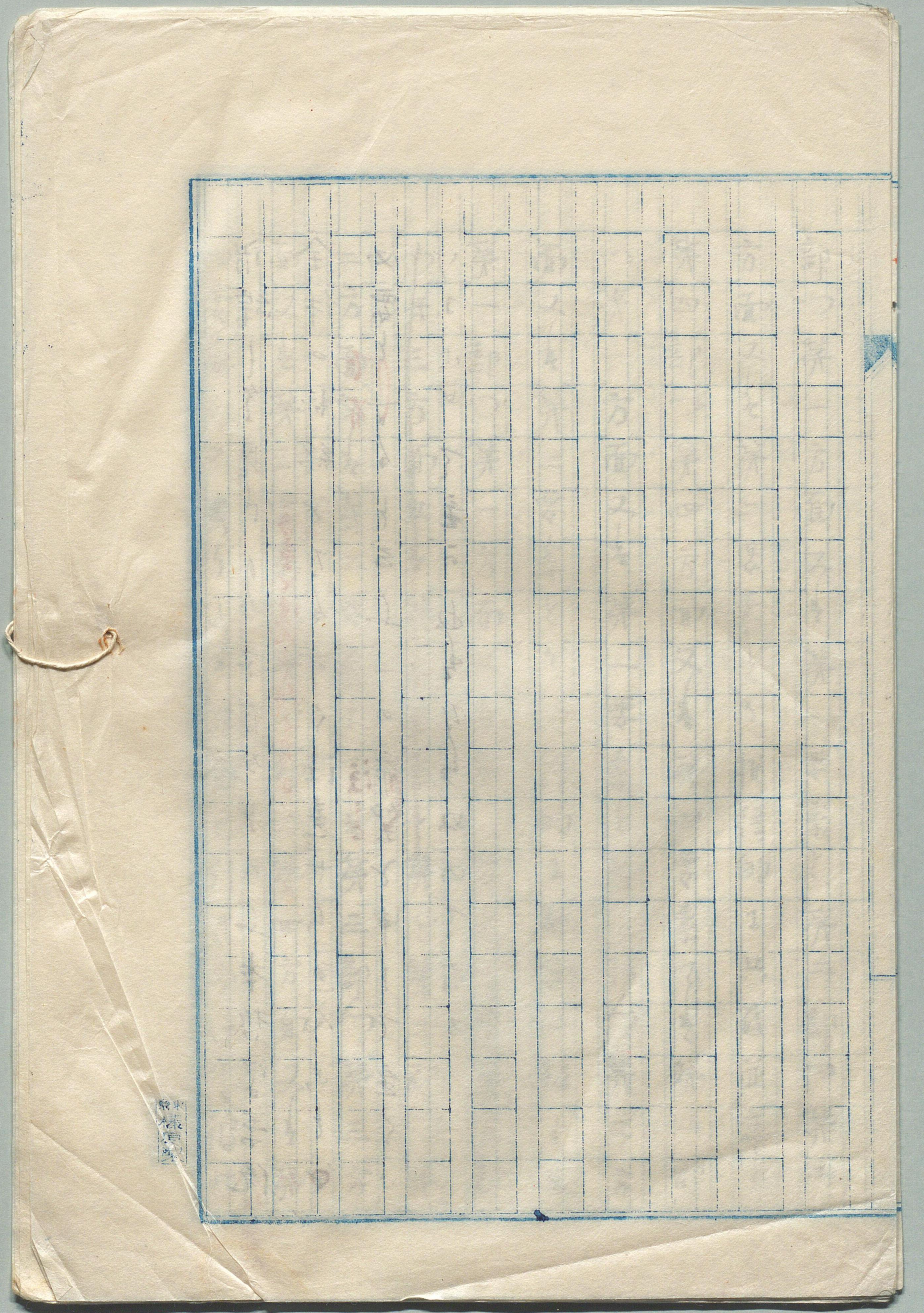


部つ第一方面又と第一要素と第二部の第二
方面又と第二要素とが相対的の共存並に
第四部の第四方面又と第四要素と第一部
の第一方面又と第一要素と第二部の第二
方面又と第二要素とが他待的の融合一致又
第一部の第一方面又と第一要素と第三部
の第三方面又と第三要素と第二部の第二
方面又と第二要素と第四部の第四方面又と第
四要素との異りしうの方面と引き分けて彼此

泉橋屋

大いん

錯綜しを見しめりあふ有る云々本哲学系統
全体の脈絡と^{各要素と種々行く}可く注意せらるる人にと
必要と^下する^下と云ふ一の希望と申してまゝ
けり止めてまゐるぬをりぬの有る



本論

第一部 歸納的哲学

第三章 歸納的哲学研究ノ四種方面

定祝 歸納的哲学ハ四種方面ヨリ全宇宙一切

萬有ノ窮極的原理ヲ研究ス第一ニハ主觀的方

面第二ニハ主觀的方面第三ニハ相待的方面第

四ニハ絶待的方面即チ是ナリ

證明 第一節 本章より第八章までで前章に於て列挙

した所の四種部門的哲学の第一種種 歸納的

哲学と研究するの系有る歸納的哲学と前章

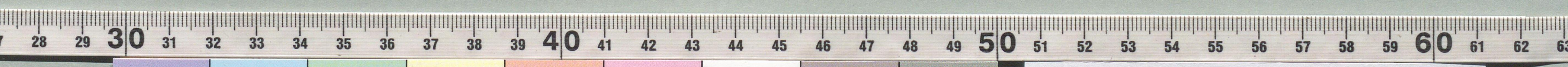
その言ふ如く此全宇宙一切萬有を研究し
て其積極的原理を發見せざるの學問を有るべ
此全宇宙一切萬有を研究せると言ふても散
漫として數限りもせず全宇宙の此一切萬有
と一つ一つ捉へて一々其力を研究せると言
ふ謀も亦とを限り有る人間の力を出來得る
るべしををせんあらしなる其れを至極
簡便なる方法の有る此全宇宙一切萬有の研
究に就く昔より經驗的各科学に於て手は
手とて一經驗に經驗とて一別して前世紀以

中橋啓堂

降と其發達の著しく隨分長足なる進歩と為
して吾る命其經驗的各科学研究の至極極處
に於ても亦や經驗的各科学の力を其れと
研究せざるを亦とを出來ぬら宜しく頼むと言
ふと純粹哲学の方へ引か渡して所の問題の
四つ有る此四つの問題を研究して其れを
此歸納的哲学研究の對象とする全宇宙一切萬
有を一つ一つに就て之を研究して之を解決し
よのと全く同一結果を有る

第二節

さて其經驗的各科学研究の至極極



處に於て其能力の及ハざる所の有るものと
自ら察知して純粹哲学に向て其解決を求め
純粹哲学を其研究の開場発端として歸一的
に其解決を試むる所の四種の問題は何の有
ると言へば

第一の如き人を類と接觸して吾人を類の認
識力と發揮し吾人を類思想力の客体と為る
所の客観的自然即ち有ると言ふことの本質
は何の有るものか問題の有る
第二の如き客観的自然即ち有ると言ふものと

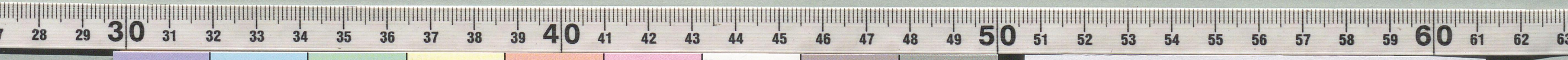
東洋
書院

吾人の類の主観的精神を刺撃し主観的精
神として也と認識し之を思想せしめ主観的
精神として主観的精神とらへしむる所の客観
的自他即ち有ると言ふことの窮極的本質を
何の有るものか問題の有る
第二の如き客観的自然と認識し思想し其存在
を證明し客観的自他として客観的自他とら
しむる所の主観的精神即ち知ると言ふこと
の窮極的本質を何の有るものか問題の有
る

第三より客観的自在と主観的精神と刺撃し
る認識力思想力を発揮せしめて主観的精神
として主観的精神よりその主観的精神と客
観的自在と認識し思想し其存之と證明せし
て客観的自在として客観的自在よりしむる
ので有るより二者を相待的共存並立しむる
所の二つのより有るよりと言ふ問題を有るは
第四より客観的自在と主観的精神との認
識せらるる思想せらるる其存之と證明せらるる
より因り始めて客観的自在と又主観的精

東洋書院

神と唯客観的精神自在と認識せしめらるる思想せ
しめらるる其力用と発揮せらるるより因り始め
て主観的精神と有るので有るより二者を絶
対的互に双に止むる所の唯一つのより有
るより言ふ問題を有る
第三節 前節より列挙しし所の四つの問題の
中の第一の問題を解決せるの第一主観的方面
の研究と有る第二の問題を解決せるの第二客
観的方面の研究と有る第三の問題を解決せ
るの第三相待的方面の研究と有る等



四の問題と解決せるのが第四の他待の方
面の研究を有る此四の問題と解決ぬを
此歸納的哲学の本分職事として此全宇宙一
切萬有と一つ一つ捉へて一々其れを研究し
一々其れを解決しよのと全く同一結果を為
るの不可有るところ此全宇宙一切萬有の窮極
的原理を何ぞ有るのと言ふはと明瞭なる解
せらるゝの不可有る

第五節

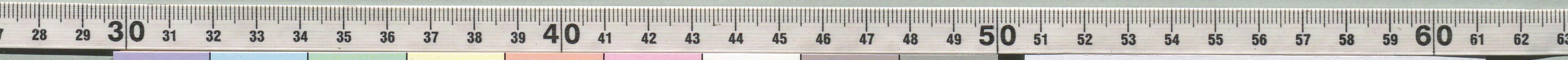
元來客觀的自他とを有ると言ふは

自下有る主觀的精神とを知らると言ふは力用

力用を向て下
の名稱

東洋學

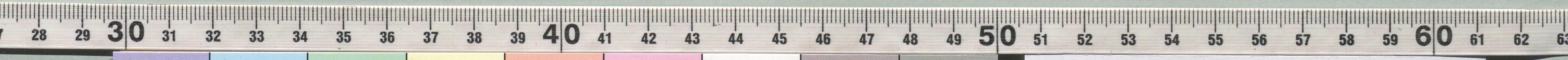
向て下しよ所の名稱を有る而して有ると言
ふはとを知らして有るはとを知らると言ふは
とを有ると知るはとを有るはとを有ると言ふ
はとを離れて知るはとを元來ぬを知らると言
ふはとを離れて有るはとを元來ぬの不可有る
諸と代て之と言ふは客觀的自他有ると主觀
的精神を有る主觀的精神を有ると客觀的自
他を有るはとを客觀的自他を有ると言ふは主
觀的精神を多く自觀的精神を少く客觀的自
他を少く有る全く左と右と對せるの左



右と左と對するの右を有るから左可有れと
右も有り右が有れと左も有りけしとも左も
せけれと右もせく右のせけを左もせし原
因と結果と待するの系因結果と系因と待す
るの結果を有るから原因を有る結果を有
り結果を有るを原因を有るけしとも系因を
せけをせし結果をせく結果のせけを原因も
せしと言ふのと同トヤとせし不一不異と言ふ
て全く同一のものでもせけを全く異りた
るものでもせく不即不離と言ふて全くツ

東林堂

付以しとのでもせく全く離れしとのでもを
以の有る
第六節 然るは従前の哲学研究を終る其必
由の門戸不有るやうに言ハヤして居る所の
認識論など不認識の起原と論じるは経験論
と純理論との二つの反對論あり認識の本
質を説くは實在説と觀念後との二つの反對
論あり有るは経験論と認識と経験の起る言
ふ論を有るあり認識を未だ認識せしむる所
の客體と知識の起ると言ふの不可



第七節

本章に列挙した所の

四種方面の研究の

四種方面を畢

竟混然と分割分離を可らざる此全宇宙

一切萬有と四種の方面より觀察し研究して

其窮極的原理を究見せざるの不可有るより研究

して行く間は一方面的の重きを置きて他の

方面と等視してはならぬ主観的方面の

重きを置きて研究せしむる唯心論は流し第二

なる客観的方面の重きを置きて唯物論

に入り第三なる相対的方面の重きを置

けて二元論を落ち第四なる絶対的方面の

東橋屋製

重きを置きて不可思議的一元論を偏せざる

と言ふやうに各自一方面的の研究のりと偏重

し一系統の成れのこみ拘泥して其範圍を廣

大無邊にして其秩序を嚴正精確なる真理の

全体と遠觀通視せざるをなく申是乙非左支

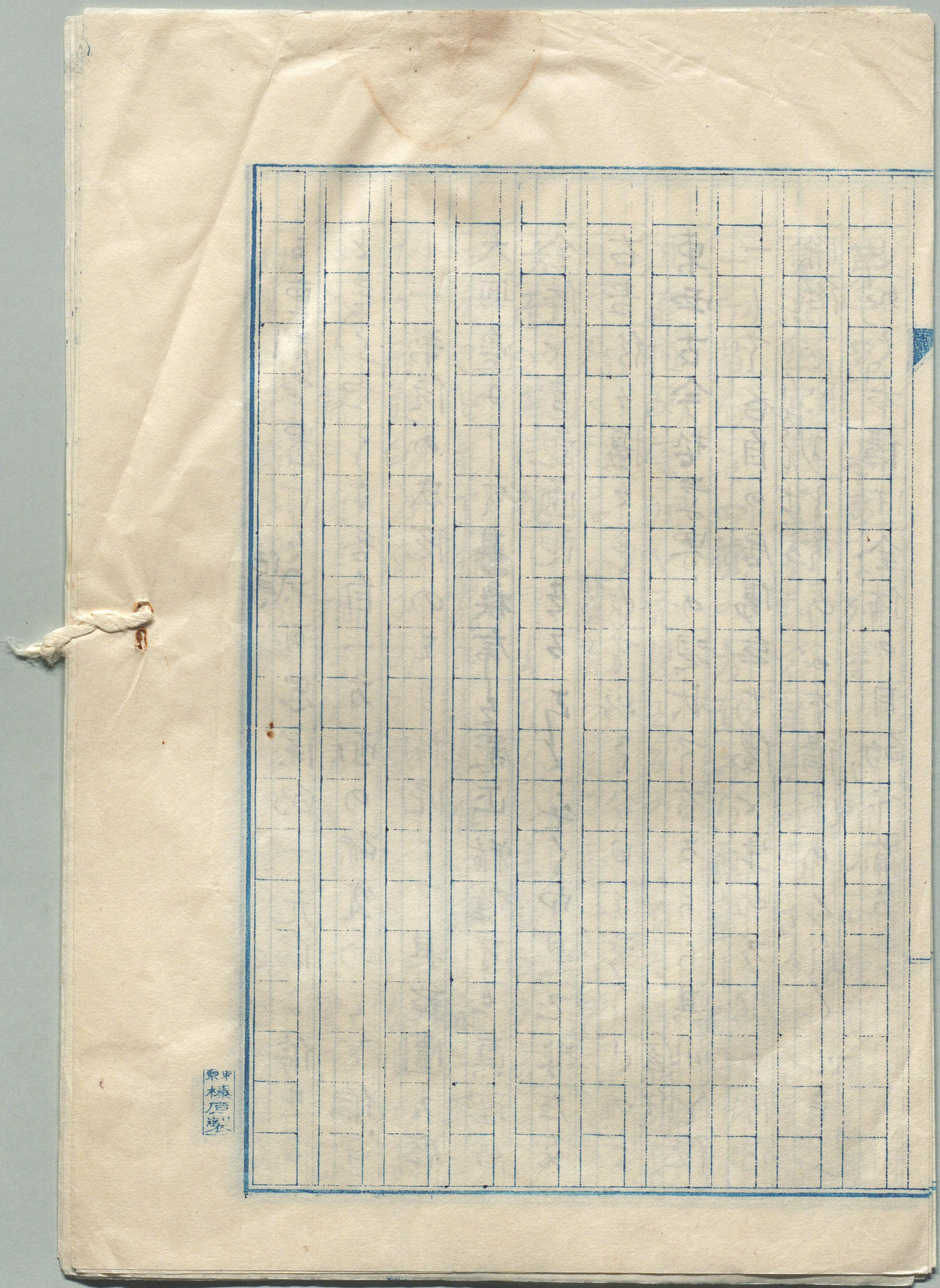
右吾等々擾々として以て今日を多うこの

東西古今哲學界の現状を有るより其此の

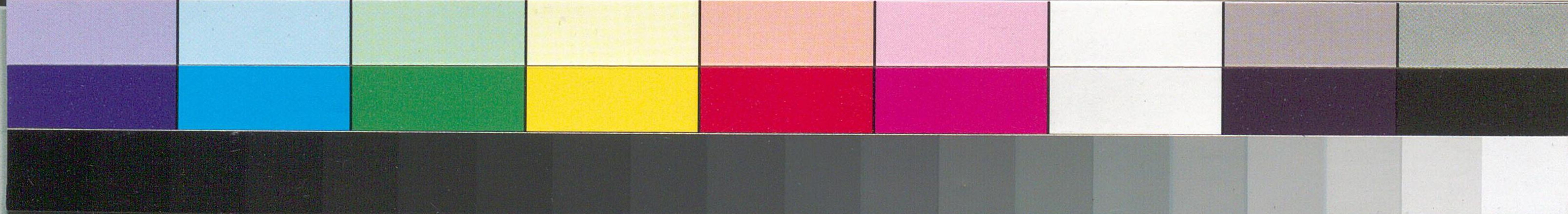
一して各自の居場立ち場と定め互相の關係

聯絡を的にするのの本構はのりくと言ふ

と如く本構は全体の目的を有る



泉
林
堂



国立国会図書館 渡辺国武関係文書(その2) 1060